



三彩宝相華文五耳壺 聖なる花に彩られた茶壺

茶壺は、茶の湯で用いる茶葉を保管し、運搬するための器です。現代では茶壺を目にする機会はほとんどありませんが、中世から近世にかけての頃には、その堂々たる姿が愛され、名品が競って求められました。茶会では、しばしば床の飾りとしても用いられました。

彦根藩井伊家においても茶壺が熱心に収集されたようで、明治時代の道具帳を細解くと、三十四点もの茶壺が蔵されていたことが分かります。関東大震災などによってその多くが失われてしまいましたが、現在、当館が所蔵する井伊家伝来の茶壺は九点を数えます。このうち五点は中



写真① 三彩宝相華文五耳壺（当館蔵）



写真② 宝相華文様部分

国の産で、日本にもたらされた後に茶壺に転用されたと考えられます。写真はそのうちの一つです。別作りの文様形を貼り付けて立体的に形作る貼花の技法に細密な線刻を巧みに織り交ぜ、胴部中央には宝相華、下部には蓮の花弁が伸びやかな形態で表されています。宝相華と蓮は仏教の聖花であり、もとは何らかの仏教儀礼で用いられた器だったのかも知れません。茶壺というと、褐色や灰色などの暗い釉色が多いのですが、本作は、緑と黄、紫の鉛釉を掛け分ける三彩と呼ばれる技法で制作されており、実に鮮やかな色合いです。

三彩は、唐代の作がよく知られていますが、本作は、明代（一三六八～一六四四）後期に中国の福建省南部の民窯で制作されたと考えられるものです。これらは、桃山時代から江戸時代にフィリピンやベトナムを経由して日本にもたらされたと考えられています。

日本ではかつて、この種の三彩作品は、交趾（現在のベトナム）が産地と考えられていたことにより、「交趾焼」と呼ばれてきました。しかし現在では、曖昧さを避けるため華南三彩と呼称されることが多くなっています。華南三彩の鮮やかな色遣いは日本の人々を魅了し、京焼や九谷焼などの発展にも大きな影響を与えたと言われています。

本作と同様の模様形式の華南三彩の壺は、遺跡からの出土品も含めて、十数件が確認されています。国内では、大分県（大分市）の勝光寺に伝来した大名大友氏ゆかりの茶壺などが知られ、また近年では、長崎県（壱山町）に伝来した同様の壺が、キリ

シタンの聖油壺として用いられた可能性が指摘されています。国外では、フィリピンをはじめとする東南アジア地域で確認されており、イギリスの収集家ジョン・トラヴィス・カント（1638～1688）が同地で収集したものが知られています。このように、国内外で類例が知られますが、これらの中で本作は、整った形態と鮮やかな釉色で抜きん出た優品であり、この種の壺を代表するような作と言えます。

中世から連綿と受け継がれた伝統的な茶壺の美は、茶色や灰色のモノトーンな色合いの中に見いだされてきました。それらに比べて異例の華やかな色彩をまとう本作は、近世における茶壺の新しい美を体現するよ

【彦根城博物館学芸員 奥田昌子】
三彩宝相華文五耳壺は、テーマ展「茶壺―武家の美意識―」で5月17日（金）～6月18日（火）の期間、展示します（期間中無休）。